

「もうひとつのライフスタイル」

－ ベンガル社会と宗教的芸能集団 －

村 瀬 智

１．はじめに

インドの社会をもっとも顕著に特徴づけているのは、独特の身分階層制度であるカーストである。カースト制度は、いくぶんゆるんできたとはいえ、いまだにインドの人びとの職業や結婚、食事などの行動をきびしく規制している。ところが、世俗のヒンドゥー教徒の生活と密接にかかわりながら、「世捨て人」（現世放棄者）がインドの社会的景観の不可欠の部分として何千年も存在しつづけているという事実は、意外とみすごされてきた。

インドという複合社会の構造全体の維持にはたす「世捨て人」の役わりの重要性に注目したのは、おそらくデュモンが最初であろう。彼は、「ヒンドゥー教の秘密を解くかぎは、世捨て人と世俗内人間との対話のなかに発見されるだろう」と洞察し〔Dumont 1960: 37-38〕カースト制度と世捨ての制度とのあいだには、社会全体の均衡をたもとうとする弁証法的関係が成立していると仮定し、「カースト制度というものが、それに矛盾する世捨てとは別個に存在し、また持続しえたかどうか疑ってみるがよい」と主張している〔Dumont 1970: 186〕

古代インドでは、「ダルマ」（*dharma* 宗教的義務）を遂行すること、「アルタ」（*artha* 実利）を求めること、「カーマ」（*kâma* 愛、とりわけ男女間の性愛）を追求することが人生の三大目的とされ、この三つを充足しつつ家庭をいとなみ、子孫をのこすのがひとつの理想とされた。また一方では、とくにウパニシャッド思想以降、世俗の世界を放棄し、こつじき（乞食）遊行しつつ

苦行や冥想によって輪廻から脱却すること、すなわち「モクシャ」(*moksha* 解脱)を達成することが宗教の最高目標とされた。

中世以降、神への絶対的な帰依を内容とする「バクティ」(*bhakti*)の思想が展開したヒンドゥー教は大きく変化した¹⁾。しかし現代においても、カースト社会に生きる世俗の人びとにとって、世捨て人は相反する生活様式を採用した人であるが、「究極の理想を追求する人」として存在しているのである。そして世俗の人びとは、世捨て人に食べ物や金などを施し、彼らの生存を保証しているのである。それは、世帯主としての「義務」(*svadharma*)とされているのである。

本稿は、インド・ベンガル地方の「バウル」(*bâul*)とよばれる宗教的芸能集団のライフヒストリーの分析を通じて、カースト制度と表裏一体の関係にある世捨てが、現代においてどのように機能しているかを考察する²⁾。

2. 研究対象の概略

バウルのベンガル社会にあたえているイメージは、わざと社会の規範からはずれようとする狂人のイメージである。バウルは、カーストの存在そのものをみとめない。またバウルは、偶像崇拜や寺院礼拝をいっさいおこなわない。彼らの自由奔放で神秘主義的な思想は、世間の常識をこえたり社会通念からはずれることがあり、人びとからは常軌を逸した集団とみなされることがおおいのである。実際に、ベンガル語の「バウル」という語は、もともと「狂気」という意味である。そしてその語源は、サンスクリット語の“*vâtula*”(affected by wind-disease; mad, crazy)あるいは“*vyâkula*”(intently engaged in or occupied with; confused, disordered)に由来するようである[Chatterji 1986: 342, 423, 513]

バウルの歴史がどこまでさかのぼれるかは不明である。しかし、中世のベンガル語の文献では、バウルという語は、「(牛飼いの女)ゴピーがクリシュナに恋

をしたように、神に恋をして) 狂気になった人」という意味でつかわれはじめている。たとえば、16世紀のベンガルの熱狂的な宗教運動の指導者チャイタニヤ (Caitanya 1485-1533)³⁾ の伝記には、「我、クリシュナのはてしなき甘露の海にさまよい、狂気 (パウル) となれり」といったような文脈でしばしばでてくる [Sen and Mukhopâdhyây 1986: 325]。しかしパウルという語が、そのころに狂人のような宗教的態度の「個人」をさしていたのか、あるいは「宗派」としての意味をもちはじめていたのかどうかは、まったくあきらかでない。

現代のベンガルでは、パウルという語には、まだ「狂気」というふかい意味がひそんでいるが、その語はもっぱら「パウルの歌と音楽を伝承する一群の人びと」、あるいは「パウルの歌と宗教を伝承する一群の人びと」をさす、といっただけで済まない。しかし、その「一群の人びと」が、いったい何人いるのかあきらかでない。インド政府が十年に一度おこなう国勢調査の数字にあらわれてこないほど、パウルは少数である。それにもかかわらず、パウルはベンガル社会で、はっきりと目だつ存在なのである。

パウルがベンガル社会で目だつのは、彼らのライフスタイルが、一般のベンガル人のそれとは根本的に異なっているからである。そのちがいは、「生活費の稼ぎ方」である。

パウルは、世俗的な意味で非生産的である。彼らは農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などに、いっさい従事していない。パウルは、一般のベンガル人に経済的に依存し、「マドゥコリ」(*mâdhukari*) をして生活費を稼いでいるのである。ベンガル語の辞書 (*Samsad Bengali-English Dictionary*, 1987) は、「マドゥコリ」という語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物ごいをして歩くこと」と説明している。すなわち、ベンガルのパウルとは、「みずからパウルと名のり、パウルの衣装を身にまとい、人家の門口でパウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことである。パウルは、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのである。手元の国語辞典 (『新明解国語辞典』第5版、1997) は、

「門づけ」を「人の家の門口で歌をうたうなりの芸をし、お金や食べ物をもらって歩くこと」と、また「たく鉢」を「僧尼が修業のため鉢をもって経文を唱えながら人家を回り、米・お金をもらって歩くこと」と説明している。本稿では、ベンガル語の「マドゥコリ」の訳語として、「門づけ・たく鉢」と表記することにする。

この門づけ・たく鉢の生活は、ひとりの人間が「バウルになる」ためにも、また「バウルである」ためにも、不可欠の条件である。これは彼らが選択したライフスタイルである。そして、このライフスタイルそのものが、門づけ・たく鉢の生活にはじまり、神との合一というパウルの宗教の究極の目的にいたる「パウルの道」(*bâul path*)なのである。彼らは、「バウルは富をもたないこじきです。わたしたちの唯一の財産は、この肉体です。しかし、この肉体には神が住んでおられる。それ以上に何が必要ですか」と語るのである。

パウルの宗教はパウルの歌に表現されている。しかし、パウルの宗教には秘密のことがらがおおいので、その秘密をうたいこんだパウルの歌には、しばしば「意図的な語句や表現」(*sandhâ bhâshâ*)が使用されている。つまりパウルの歌には、表面上の意味の奥ぶかくに、かくされた「真の意味」をふくむ「暗号のような語句や表現」が、意図的に使用されているのである⁴⁾。このためパウルの歌は、部外者にとっては難解で、いくつもの解釈が可能であったり、あるいは意味不明のことがおおい。その反面、部内者には「なぞ解き」をするようなおもしろさがあるといわれる。

パウルの宗教は、タントリズムの流れを汲むサハジーヤ派の思想⁵⁾、ヨーガの修行法、イスラム神秘主義など、いくつもの宗教的伝統の影響を受けている。しかし、パウルの宗教の核心的な部分は、「サドウナ」(*sâdhana*)とよばれる宗教儀礼の実践にある。そして、この実践的なサドウナのすべては、「人間の肉体は真理の容器」という信仰にもとづいている。バウルは、この信仰のことを「デハ・タットヴァ」(*deha tattva*)とよんでいる。

この信仰をもうすこし整理すると、ふたつの原理に分解できる。(1) 人間

の肉体は、宇宙にあるひとつの「もの」であるだけでなく、宇宙の「縮図」である。(2) 人間の肉体は、神の「住みか」であるばかりでなく、神を実感するための唯一の「媒介物」である。つまりパウルは、人間の肉体を小宇宙とみなし、みずからの肉体の内部に存在する神と合一し、神を実感するために、みずからの肉体を使用してサドゥナを実践するのである。このサドゥナには、ヨーガの実践を通じておこなわれる性的儀礼や、宇宙を構成する五粗大元素（すなわち「地」「水」「火」「風」「空」）を、人間の器官や分泌物にたとえておこなわれる儀礼などをともなう。そしてサドゥナに関することがらは、もっぱらグル（導師）から弟子へ、こっそりと伝えられるのである⁶⁾。

ときどき夕方などに、グルのアーシュラムに弟子たちが集まってくることもある。そこでもサドゥナについて議論されることがあるが、それは主としてパウルの歌の解釈を通じてである。彼らはパウルの歌をうたい、パウルの歌の「なぞ解き」を楽しんでいるのである。しかし、歌の「真の意味」は秘密とされ、議論はグルとその弟子たちのあいだにかぎられる。そして彼らは、秘密のことさらにに関しては、用心ぶかく慎重に発言するようにと、戒められているのである。

3．パウルの社会組織

パウル研究者のあいだでは、「パウル」という語は、「ベンガルのひとつの宗派とその宗派の構成員をさす」という見解が、ほぼ承認されているようである⁷⁾。しかしこの見解は、はたして正確なのだろうか。

フィールド・ワークの期間中、筆者はしばしば、パウルが自分自身のことをどのように認識しているかについて質問をした。筆者がもっとも頻繁にきいた答は、つぎのふたつである。(1)「わたしはパウルです」。(2)「わたしは『パウルの道』をあゆんでいます」。しかし、だれひとりとして「わたしは宗派の構成員です」とはこたえなかった。パウルにとって、彼らが宗派の構成員であ

るかどうかは、それほど重要なことではなさそうである。

フランスのインド学者ルヌーは、「インドの宗派の基準」について論じている。彼によると、インドの宗派は、つぎの3つの基準をそなえているとされる。第1に、特有の神格や聖典を堅持していること。第2に、独自の哲学的視点を採用していること。そして第3に、だれかによって創設されたこと [Renou 1968: 91-95] である。これらの基準をそなえたインドの宗派を検討してみると、そのほとんどの場合、構造的にふたつの部分からなりたっていることに気づく。第1に、行者、苦行者、隠とん者、たく鉢修業者などの宗派の中心的部分、つまり世俗の世界を放棄した「世捨て人」である。そして第2に、数量的にははるかにおおきい、家庭をもった一般の信者グループ、つまり「在家の人びと」である。

インドの宗派の基準をかんがえと、たいへんあやふやで漠然とした組織ではあるが、ベンガルには「バウル派」(*bâul sampradâye*) とよべそうなものが存在する。そしてベンガルのバウル派が、インドの宗派としての構造をそなえているかのように、そこには2種類の通過儀礼がみとめられる。

まず第1は、「ディッカ」(*dîksa*) とよばれる「バウル派への入門式」、あるいは「特定のグルへの入門式」である。この入門式のグルは、「ディッカ・グル」とよばれ、入門者の耳に「ディッカ・マントラ」をふきこむ。このあと、「シッカ」(*sîksa*) とよばれる一連の「宗教的トレーニング」が開始されることがあり、そのグルは、「シッカ・グル」とよばれる。シッカ・グルは、ディッカ・グルと同一人物であってもよいし、別人であってもよい。また、複数のシッカ・グルをもってもよい。そして第2は、「ベック」(*bhekh*) とよばれる「世捨て人の身分への通過儀礼」である。この通過儀礼のグルは、「ベック・グル」とよばれ、弟子にあたらしい「こつじきの鉢」(*bhiksâpâtra*) をあたえる。男性の弟子は、こつじきの鉢にくわえて、あたらしい「ふんどし」(*dori-koupîn*) もうけとる。

それでは、いったいだれがバウル派を構成しているのであろうか。筆者の観

察によると、バウル派の構成員には、門づけ・たく鉢で生活するバウルだけでなく、かなりの数の在家の信者も存在する。それらの在家の信者は、ベンガルのいなかの町や村に住む、ごくふつうのヒンドゥー教徒やイスラム教徒である。しかしそれらの在家の信者は、彼らのグルに入門し、一連の宗教的トレーニングを受け、バウルのサドウナを実践しようと努力している。たとえば、ビルブム県のラムプールハートから東に約8キロのT村に、たいへん尊敬されているバウルが住みついており、その村で重要な役割をはたしている。ほとんどすべての村びとは彼の信奉者だったし、実際、そのおおくは彼の弟子だった。しかし弟子である村びとは、自分たちのことをバウルと名のらなかつたし、他者からもバウルとみなされていなかった。つまり、たとえバウル派の構成員であっても、その人が門づけ・たく鉢の生活をしないかぎり、バウルとはみなされないのである。

論理的に、ディッカの通過儀礼を受けた人は、すべてバウル派の構成員である。バウル派の在家の弟子は、ディッカはうけているが、ベックの通過儀礼を受けていない。ディッカは、人に、門づけ・たく鉢の生活を強制しない。もし在家の弟子がベックを受けたとしたら、その人は世俗の生活を放棄し、門づけ・たく鉢をして生活しなければならない。これはルールである。

それでは、バウルはバウル派の世捨て人のことで、すべてのバウルはディッカとベックの通過儀礼を受けているのだろうか。筆者の観察によると、何人かのバウルは、ディッカとベックの両方ともうけている。また何人かは、ディッカだけをうけている。しかし、大半のバウルは、その両方とも経験していない。

ディッカの通過儀礼を受けていないバウルは、バウル派の構成員ではない。したがって宗教的トレーニングも受けていない。しかし彼らは、「わたしはバウルの道をあゆんでいます」とこたえたのである。バウルの道をあゆんでいると語った彼らは、「バウルの歌と音楽の伝承者」である。しかし、「バウルの歌の伝承者」は、かならずしも「バウルの宗教の伝承者」ではないのである。

それでは、パウルの道をあゆんでいると語った彼らは、パウルの衣装を着てパウルの歌をうたうだけの、「にせもの」のパウルなのであろうか。すでにあきらかなように、宗派という視点からでは、ベンガルのパウルの現実が把握できない。なぜならば、パウルという語が「ベンガルのひとつの宗派とその構成員」をさすなら、みずからパウルと名のらず、他者からもパウルとみなされていない「在家の弟子」を、ベンガルのパウルとして容認しなければならないからである。また、みずからパウルと名のり、他者からもパウルとみなされている多数の「にせもの」を、ベンガルのパウルから除外しなければならないからである。

パウルのライフヒストリーに関する筆者の資料⁸⁾は、ディッカの通過儀礼をうけたパウルは、それをうけた時点で、すでに門づけ・たく鉢の生活を採用しパウルになっていた、という事実を暴露する。そしてベックの通過儀礼は、ディッカの通過儀礼よりも、さらにのちの人生のでき事だったのである。

「神との合一」というパウルの宗教のゴールに到達するためには、パウルの宗教儀礼を実践しなければならない。そのためには、ディッカをうけて特定のグルに入門し、一連の宗教的トレーニング(シッカ)をうけることが不可欠である。しかし、おおくのパウルが証言する。「パウルの道の第一歩は、門づけ・たく鉢の生活を採用することである」と。ベンガルのパウルは、本質的に、「パウルの道を追求する人」である。パウルの道の追求者とパウル派の構成員とは、かなりの部分で重複する。しかし「パウルの道」と「パウル派」とは、次元のちがう概念なのである。

おおくのパウルが説明してくれた「パウルの道」を要約すると、つぎのようになるかとおもう。——人は、もしパウルの道にしたがうならば、だれでもパウルになれる。ただし、パウルの道の第一歩では、人は、(カーストの義務を放棄し)門づけ・たく鉢の生活を採用しなければならない。パウルは富をもたないこじきである。パウルの唯一の財産は、パウル自身の肉体である。しかし、人間の肉体には神が住んでいる。パウルの道の究極の目標は、人間の肉体

の内部に存在する神と合一し、神を実感することである。パウルと名のり、パウルの歌をうたい、門づけ・たく鉢の生活をするだけでは、人は、パウルの道の半分しかすすんでいない。パウルの道の究極の目標まで到達したいとおもう人は、結局は、パウルの歌を通じてパウルの宗教を学び、ヨーガを通じて自己鍛練に努力し、パウルのサドゥナを実践しなければならない。そのためには、師の導きが必要である。

4．ベンガル社会とパウル

「門づけ・たく鉢」の生活は、パウルが選択したライフスタイルである。つまり、ベンガル社会の「一群の人びと」が、門づけ・たく鉢という世捨て人のライフスタイルを採用し、「パウルになった」のである。それでは、ベンガル社会の、「だれが」「なぜ」門づけ・たく鉢の生活を採用し、パウルになったのであろうか。

まず、パウルの姓と出身カーストを検討しよう。

19世紀末以降、姓を名のることが一般化する過程で、ヒンドゥー教徒の姓として採用されたのは、カースト（ジャーティ）名、ゴートラ（伝説的な始祖に結合した外婚集団）名、称号・資格、先祖の発現地やその特徴、職業・役職名などであるという〔藤井 1992: 411-512〕。しかしベンガル社会の、いったいだれが「パウルの道」をあゆみはじめたのかを、パウルの姓からさぐることはほぼ不可能である。なぜなら、ほとんどのパウルは、パウルになった時点で改名し、あたらしい姓として「ダシュ」（Das「神のしもべ」）や「ダシュ・パウル」（Das Baul「神のしもべのパウル」）といった宗教名を名のっているからである。これらの宗教名には、出自や家柄などを暗示する「しるし」がまったくない。パウルに彼らの以前の姓について質問しても、約半数のパウルはこたえようとしなかった。

出身カーストについての質問には、ほとんどのパウルがこたえなかった。な

かには「人間カースト出身」(人間にはカーストの区別はない)とか、「鳥カースト出身」(鳥のように自由だ、つまりカーストがない)とこたえて、筆者の質問をはぐらかすバウルもいた。このことは、バウルがカーストそのものを否定していることを反映している。また、質問にこたえてくれたバウルの出身カーストも、最上層のバラモンから中層や下層カースト、そして最下層にいたるまで、ベンガル社会の全階層におよんでいる。したがって、バウルの出身カーストの傾向についても、これといった結論をだすことができない。

インドの学校教育制度は、普通教育10年(初等教育5年、前期中等教育5年)、後期中等教育2年、大学教育3年である。1991年の国勢調査の結果によると、7歳以上の識字率は52%で、はじめて半分をこえた。これは全国的な就学率の向上の結果である。しかし性別でみると、男子64%、女子39%で、この格差は独立以来縮小していない。

バウルの学校教育年数を検討しよう。66名のインフォーマントの学校教育年数は、10年以上が2名(3%)、10年が1名(1.5%)、6年から9年が6名(9.1%)、5年が5名(7.6%)、1年から4年が23名(34.9%)、1年以下が29名(43.9%)である。これらの数字から判断するかぎり、バウルの識字率は、一般のベンガル人のそれと、ほぼかわらないようである。学校教育年数1年以下には高齢者や女性がおおいのも、一般のベンガル人の傾向と一致する。ちなみに、学校教育年数10年以上の2名のバウルは、いずれも大学卒である。

バウルの学校教育年数の特徴は、初等教育(小学校)や前期中等教育(中学校)の修了者に対して、中途退学者の比率がたかいことである。これは、大多数のバウルが、ベンガル社会の経済階層の下層または最下層出身者であることを反映している。貧困層にとって、不測の事態が発生したときに対処しうる手段は、まず教育費を削減することである。

ベンガル社会の「だれが」「なぜ」バウルになったかを、バウルのライフヒストリーから考察しよう。まず、いくつかの事例を紹介しよう。

事例 1 :

NCBは、1952年、東パキスタン（現在のバングラデシュ）のダッカ県N村で生まれた。生まれてまもなく、両親とともにインド・西ベンガル州ナディア県T町に、難民として移住した。ナディアに移住してから妹がふたり生まれたが、父母は別居状態で、父は月に1度か2度家に帰るだけだった。父母は不仲で、夫婦喧嘩が絶えなかった。NCBが4歳か5歳の時、父母は正式に離婚し、父は24パルガナス県のN村に転出した。両親の離婚後、妹たちは、母のもとに残ったが、NCBは父方の祖母といっしょに住むようになった。祖父はすでに亡くなっていた。祖母は詠歌をうたって物ごいをしながらNCBを育てたという。

NCBが8歳か9歳のとき、母が亡くなった。母の死を父に知らせたが、父は来なかった。それ以後、父から消息が絶えている。妹たちとも会っていない。

NCBが12歳か13歳のとき、祖母が亡くなった。祖母の死後、NCBはひとりぼっちで、ナディア県やムルシダバード県を転々とした。生活費は、村や列車で歌をうたって稼いだ。歌や音楽は子どものころからすきで、母や祖母から習った。NCBは、15歳か16歳ころから、バウルと名のり、バウルの衣装を着て、バウルの歌をうたうようになった。バウルの歌は、他のバウルがうたっているのを聞きおぼえた。

NCBは、19歳か20歳のとき、ナディア県で結婚したが、まもなく離婚した。17歳になる息子は、現在ナディア県に住んでいるが、ここ数年会っていない。NCBは、27歳か28歳のとき再婚した。現在は、2度目の妻と子どもたちと暮らしている。

NCBは、昨年（1987年）、ナディア県A村からビルブム県B市S地区に移住した。その理由は、S地区は駅に近く、列車で歌をうたって稼ぐのに便利だからである。またB市は、ヴィシュヴァ・バーラティ大学の所在するシャンティニケタンに隣接しており、バウルの歌の歌手として活動する機会がおいと考えたからである。

事例 2 :

PRDは、ビルブム県のJK村に住む50代後半のパウルである。彼はバルドマン県のB村で生まれた。彼の父はパウリ・カースト出身で、日雇いの農業労働者だった。しかし父は病気で、ずっと寝たきりだった。

PRDは、子どものころから歌や音楽がたいへんがすきだった。彼は素人の音楽ずきのグループに参加し、そこで歌をうたったり、踊をおどったりしていた。隣村の「カナイ・バブ」がグループのリーダーだった。ある日、カナイ・バブがPRDをむかえに家まで来ていた。PRDは病床の父に、「カナイ・バブがむかえにきてくれた。ぼくは歌をうたいに行きたい。彼といっしょに行きたい」と、許可を求めた。そのとき、父はしばらく息子の顔をみつめ、「おまえは、将来、歌をうたわねば食べてゆけないだろうな」といった。PRDはまだ子どもだった。彼には、父の言葉が理解できなかった。数日後、PRDは家に帰った。しかし彼は、父に会うことができなかった。父は、PRDが11歳のときに亡くなった。

父の死後まもなく、PRDは結婚した。妻もパウリ・カースト出身だった。彼らの結婚は、双方の親族が相談してきめた。彼らは結婚したが、夫と妻はまだ幼い少年と少女だった。しかしPRDは、食べるために働かなければならなかった。彼は、かつて父がしていたように、日雇いの農業労働をして生活費を稼いだ。日の出から日没まで、ただ命じられるまま家畜のように働いた。夜になって数曲の歌をうたうのが、唯一の楽しみだった。

PRDは、ふとしたきっかけで「振り子行者」という愛称のパウルと出会った。振り子行者は、仲間といっしょにPRDの村にやってきたのである。彼らは、戸口で「神の御名」を唱えて門づけ・たく鉢をしていた。また彼らは、村の一角でパウルの歌もうたっていた。PRDは、愛用の楽器を抱えて家をとびだした。

このときPRDは、振り子行者にパウルの歌を一曲教えてもらった。振り子行者は、最初に歌詞のすべてをゆっくりと語り、そのあと、歌詞の一節一節をゆっくりと繰り返し続けた。PRDは、一節一節、振り子行者のあとをゆっくりと復唱した。振り子行者は、PRDが歌詞をおぼえると、その歌をうたわせた。PRDが

うたっているあいだ、振り子行者は手拍子を取り、PRDがまちがうと、それを訂正した。振り子行者自身は、歌をうたわなかった。しかしPRDは、振り子行者がパウルの歌をたいへんよく知っているということに、すぐに気がついた。PRDは、カーストの存在そのものを否定するパウルの歌がすっかり気にいった。そして、振り子行者にもっと歌を習いたいと思い、彼の仲間に加えてほしいと頼んだ。PRDは、パウルの歌をうたいながら門づけ・たく鉢をして生活費を稼ぎはじめたのである。そのときPRDは、16歳か17歳だった。

事例 3 :

BDBは、1937年、ビルブム県のS村で生まれた。彼はそこで、母と兄といっしょに住んでいた。BDBの母は、クリシュナ神の賛歌キールタンの名人だった。彼女は、「キールタンの歌姫」とよばれるほど華やかで、歌手としてたいへん人気があった。

BDBの父は、ビルブム県のK村でBDBたちとは別に住んでいた。彼はそこに、別の家庭をもっていた。父の実家は、最高位にランクされた由緒ある家柄の「クリン・バラモン」で、かなりの農地を所有していたという。しかし、父は財産と家庭を捨て、パウルの道を追求するようになった。彼はPDBと名のり、「エクターラ」と「ドゥギ」⁹⁾を演奏しながら歌をうたい、村から村へと放浪する生活をはじめた。

厳格な祖父にすれば、若いころからあちこちと外出し、結婚後もおちつかず人気歌手と恋仲になり、あげくのはてに妻と子をすててパウルになった父は、とんでもない「放蕩者」だったようである。しかし、父にすれば、規則でがんじがらめのクリン・バラモンの生活と、意思に反した結婚生活をつづけることは、「耐えがたいこと」だったようである。

BDBは子どものころから歌や音楽がすきで、母からたくさんの歌を習った。そして、ときどきやってくる父からも楽器の演奏法を教えてもらった。彼らは会うたびに歌をうたい、楽しくすごした。旅行にもいっしょに行った。「ジョ

イデブ・メラ」¹⁰⁾も毎年参加した。

BDBが9歳のとき、S村からB駅の裏手のS地区に移住した。まもなく、パウルとなった父も同居するようになった。しかし、彼らの生活は急に貧乏になった。このころからBDBは、歌をうたいながら門付け・たく鉢をして稼いでいる。それ以来、彼は経済的に自立している。

BDBは、20歳すぎから深刻に悩んだ時期があった。「クリン・パラモンの父とキールタン歌手の母との間に生まれた自分は、いったい何者なのだろうか。パウルの衣装を着てパウルの歌をうたっているけれど、自分は本当にパウルなのだろうか」と、何度も自問した。BDBは、歌や音楽以外の仕事の可能性についても考えた。しかし、読み書きも満足にできない彼に、まともな仕事などあるはずがなかった。BDBは、本当は門づけ・たく鉢の生活などしたくなかった。しかし、「それしか生きていく方法がない」ことを思い知った。彼は「門づけ・たく鉢の生活は、飢えよりまし」と悟った。そして、「パウルとして生きてゆくなら、グルの指導のもとにしなければならぬことがある」と気づいたのである。

事例4：

AGBは、1952年、ビルブム県北部のN村で生まれた。彼が2歳半のときに、妹が生まれた。しかし、母は産後の肥立ちが悪く、妹がまだ生後21日の乳児のときに亡くなった。母の死後、「マシ」(母の姉妹)が妹を育ててくれた。マシが出産後の授乳期だったことは、妹にとって幸運だった。AGBは母方の祖父母に育てられた。

AGBの父はパラモン司祭者だった。母の死後まもなく、父はランプールハートに転出し、そこで再婚した。父はときどき面会に来てくれた。AGBが13歳のとき、父はAGBの「ウパナヤナ」を執行し、彼に「聖紐」をつけてくれた¹¹⁾。

AGBの祖父母は、熱心なヴィシュヌ教徒だった。祖父母の家では、毎日朝夕に、打楽器をうちながら「神の御名」を勤行するのが常だった。AGBも祖父母の横にすわって勤行した。また年に1度か2度は、「モホットショブ」(宗教的

大宴会)も開催された。宴会に招待されるのは、ヴィシュヌ派の行者や在家の信者だった。家の中庭で、何百人もの招待客がいっしょに食事をする光景は、それは壮観なものだったという。さらにモホットショブの日には、数人編成のプロの音楽家が招かれ、「リーラー・キールタン」が演奏されるのが常だった¹²⁾。

祖父母はAGBを学校に通わせた。AGBは勉強が嫌いだったわけではないが、なんとなく学校になじめず、3年でやめた。学校をやめたあと、祖父母は音楽ずきの孫に、両面太鼓の「コール」を与えた。AGBはそのコールがたいそう気に入って、朝から晩まで練習した。そうこうするうちに、プロのキールタン歌手から、コール奏者として伴奏を依頼されるようになった。

AGBが16歳か17歳のとき、祖父母があいついで亡くなった。祖父母の死後、AGBは父と同居することになった。父はAGBに、バラモン司祭者としての訓練をはじめた。最初は、神像に水や花、食物などの供物を捧げ、礼拝を父の指示どおりに行った。将来は、寺院や祭の場で詳細な儀軌にもとづいて行う礼拝も訓練されるはずだった。

父の家には、父、継母、腹ちがいの弟と妹がすんでいた。しかし父の家は狭く、AGBの居場所がなかった。継母は何かにつけてAGBにつらくあたった。AGBも継母のことを嫌っていた。しかしAGBは、彼の感情を父に伝えることはできなかった。彼は、しばしば外出しては、あてもなくラムプールハートの町をうろつくようになった。

ラムプールハート駅西側のS地区に、AGBの祖父母と懇意だったラグナンダン・ゴスワミ師というビシュヌ派の行者がいた。AGBが家に帰りそびれたとき、彼はしばしば師のアシュラムに宿を求めた。AGBが「今晚泊めてください」と頼むと、師はいつも彼を大歓迎し、アシュラムに招き入れた。

AGBが21歳のとき、父が急死した。父の後継者として、腹ちがいの弟がバラモン司祭者になった。父の死後、AGBは父の家に帰らなくなった。居心地のよいラグナンダン・ゴスワミ師のアシュラムに、いつの間にか住みついてしまったのである。そしてごく自然に、AGBはコールをたたいて神の御名を唱え、門

づけ・たく鉢をして生活するようになった。

AGBが22歳のとき、ふとしたきっかけで、ひとりのパウルと友だちになった。BDBのことである。彼らは馬が合い、いっしょに門づけ・たく鉢にも出かけた。BDBはパウルであるが、門口ではパウルの歌をうたわなかった。そこではBDBが神の御名を唱え、AGBがコールをたたいて伴奏するのが常だった。

いつものようにAGBとBDBは、いっしょに門づけ・たく鉢に出かけた。それは、S駅近くの村でのでき事だった。村びとがパウルの歌を所望し、彼らを中庭まで招き入れた。そのことは、べつに驚くことでもなかった。そのようなことは、今までに何回もあった。しかし、AGBが驚いたのは、その村びとがBDBに、今うたったパウルの歌の「隠された意味は何か」と質問したことである。AGBは、パウルの歌には隠された別の意味があるのだということを、はじめて知った。彼は今まで、パウルの歌をなんとなく聞いていたのである。それ以来、彼はパウルの歌を意識して聴くようになった。そして、彼はBDBにいろいろ質問をするようになった。パウルの宗教や儀礼について、BDBはみずからすすんで話題にすることはなかったが、彼は少しずつ語りはじめたのである。こうして、AGBはパウルの道に、急速に傾斜していったのである。

事例5：

NGBは、1952年、ナディア県のK村に生まれた。彼の両親は、東ベンガル（現在のバングラデシュ）出身で、インドとパキスタンの分離独立のすこし前に、西ベンガルに移住していた。両親がK村に定着したとき、父はそこで約20ビガ¹³⁾の農地を購入した。

NGBは子どものころから音楽がすきだった。彼は学校で勉強するよりも、専門の先生に師事して、本格的に音楽の勉強をしたいと思っていた。彼は母といっしょに、彼の希望を父に伝えた。しかし、父は息子の希望を無視して学校に行かせた。子どもだったNGBは、父に逆らうこともできず、10年間学校に通った。父は息子が大学に進学するものと思っていた。しかしNGBは、大学

進級試験に失敗してしまった。父は、親の期待にそむいたと非常に怒り、「勉強が嫌いなら働け」と息子に命じた。NGBは、いくつかの片手間仕事をした。しかし、一生の仕事にしたいと思えるものは見つからなかった。

NGBの兄は父に従順で、常に父の期待にこたえていた。父のいうとおり、大学を卒業し、小学校の教員になり、父の取り決めた結婚をした。

NGBが19歳が20歳のとき、父は突然、息子の意向を無視して結婚の取り決めをしてしまった。NGBは結婚のことなど考えたこともなかった。NGBの友人には、親の取り決めた結婚に従った者が何人かいたが、結婚生活がかならずしも幸福とは思えなかった。本人の意向を無視した結婚は、人を家庭生活という牢獄に閉じ込めるだけだと思った。NGBは、生まれてはじめて父の命令を拒絶した。父は、「親の意向を無視するような息子は息子ではない。出て行け」と、どなり散らした。

数日後、NGBは家を出た。そしてパゴール・ビジョイ師を訪ねた。師はビシュヌ派の行者で、R村にアシュラムをもっていた。師は、NGBの住んでいたK村のだれかの家をとときどき訪問していたので、NGBは子どものころから師のことを知っていた。師は会うたびにNGBをかわいがり、NGBも師を慕っていた。NGBは師に事情を話し、師のアシュラムにしばらく滞在したいと懇願した。師はNGBの願いをかなえた。

NGBは、パゴール・ビジョイ師のアシュラムに約1年間滞在した。その間に、NGBはディッカを受け、師の弟子となった。NGBは師から宗教名を授けられた。NGBは、今までの人生が終了し、新しい人生がはじまったと思った。NGBはキョウダイ弟子から楽器の演奏法を習った。そして小さなシンバルを購入した。ある日、NGBは生まれてはじめて、シンバルをたたき「神の御名」を唱えながら、たく鉢に出かけた。NGBは、数時間で、数キロの米といくらかの現金を集めることができた。それは期待以上だった。

NGBは、いつもどこかへ行きたいと思っていた。彼は自分の人生を自由に生きたいと思っていた。土地や家に執着し、家庭という牢獄に永遠につながれるのだけは避けたいと思っていた。彼は一所不在の人生を送りたいと思っていた。

た。彼は、パゴール・ビジョイ師に別れを告げ、聖地巡礼の旅に出かけた。

聖地巡礼の旅が5年目に入ろうとしていたころ、NGBは西ベンガル州のB町を訪ねた。B町はインドにある51の「母神座所」のひとつである。B町は豊かな温泉でも有名であるが、町は静かで平穏な雰囲気にもちていた。NGBがB町を訪ねたとき、彼は寺院に一時的に住みついている巡礼中のサードゥー（ヒンドゥー教の出家の行者）を見かけた。NGBはB町にしばらく滞在してもよいなと思った。そして、だれも滞在していないシヴァ寺院を見つけ、そこをしばらくの宿とすることにした。毎朝、寺院の掃除をし、神像を花で飾った。神像に捧げられた供物を、「おさがり」として食べることができた。彼の寺院滞在に反対する者は、だれもいなかった。

しばらくして、NGBは、B町に数人のバウルが住んでいるのに気づいた。そして、バウルがそれぞれ、歌をうたいながら門づけ・たく鉢をしているのを見かけた。また、彼らがときどきグループを組み、いっしょにパウルの歌や音楽を演奏しているのを知った。彼らは仲がよく、とても楽しそうにみえた。NGBはパウルの歌にすっかり魅せられてしまった。

NGBは、いくつかの楽器は演奏できたが、歌はうたえなかった。NGBは、過去4年間、インド中を放浪し、聖地巡礼の旅を続けてきた。いつも孤独な一人旅だった。彼は、「この4年間の旅は、ひとりで当てもなくさまよっていただけなのか」と自問した。「そろそろ放浪生活に区切りをつけてもよいな」と思った。NGBはパウルの歌を習いたいと思った。そして、B町のパウルの仲間に加わりたと思った。

B町のバウルは、最初NGBのことをサードゥーと思っていた。なぜならNGBは、シヴァ寺院を仮の宿とする一所不在の巡礼者であり、ぼろを身にまとい、髪や髭は伸び放題、しかも所持品もほとんどなかったからである。実際、彼らはNGBのことを「サードゥー・ババ」とよびかけた。しかし、NGBのライフスタイルはサードゥーのようではあるが、彼はサードゥーではなかった。もっとも、サードゥーとみなされることは、巡礼の旅をつづけるには便利なこ

ともしばしばあった。旅行中、NGBの無賃乗車をとがめた車掌はひとりもいなかったのである。しかしNGBは、一所不在のサードゥーのような行動をやめるのは今だと思った。NGBは、パウルの歌を習いたいという彼の希望をパウルに伝え、仲間に入れてほしいと頼んだ。彼らはNGBの意外な要請に驚いた様子だったが、「OK。君がその気なら、われわれは大歓迎だ」とあっさりとして許可した。それ以来NGBは、パウルと名のり、パウルの衣装を身にまとい、パウルの歌をうたうようになった。門づけ・たく鉢の生活は、パゴール・ビジョイ師のアシュラム滞在時から続いている。

パウルに、なぜ彼らがパウルになったのかという質問をすると、十中八、九、「子どものころから歌や音楽がすきだったからだ」という答がかえってくる。しかし、個々のパウルのライフヒストリーを詳細に検討してみると、長期にわたる心理的・経済的不安を経験したのちに、パウルになったようである。ほとんどのライフヒストリーは、彼らが門づけ・たく鉢の生活を始めたか、グルをもとめたりする前に、それらの行動のきっかけとなった危機的状況があったことを、それとなくしめしている。

ベンガル社会の一群の人びとが、なぜパウルの道をえらんだのかを、ただひとつの要因をあげて説明することはできない。彼らがパウルになった動機には、いくつもの要因が複雑にからみあっているのがふつうである。それらは、慢性的な貧困、父母の別居による家庭崩壊、本人の意志のはいりこむ余地のない結婚に対する不安、世代間の反目、そして土地所有権や相続権をめぐる争いなど、解決できない抑圧の具体的な経験である。

パウルになった動機のもうひとつの主要な要因は、乳・幼児期における親の死の経験である。ライフヒストリーの資料によると、10歳未満で父親と死別したパウルは18名（27.3%）、おなじく母親と死別したパウルは14名（21.2%）である。このうち、両親ともに死別したパウルは8名（12.1%）である。これらの比率は、一般のベンガル人のそれよりも、はるかに高いと思われる。

母親の死後、母親を失った乳・幼児は、父方が母方の血縁親族に育てられ、父親は再婚してあたらしい家庭をもつことがおおいようである。いずれにせよ、このような境遇にそだったパウルは、父親の死にともなって、異母兄弟間の相続権あらそいにまきこまれた事例が数例あった。また、乳・幼児期に一家の中心人物である父親を失ったパウルは、若くして夫を死なせた不吉な存在としての母親とともに、ただちに経済的にも心理的にも不安定な状況においこまれてしまっていた。さらに、幼児期に両親と死別し孤児となったパウルは、「物ごい」をするしか生きてゆく方法がなかった。しかし、近隣の人びとの処置で、その社会の世捨て人の養子や養女として保護され、育てられた幸運なパウルも数名いた。これは、世捨て人の存在そのものが、その社会全体の維持に寄与していることを暗示している。

パウルになる動機となったその他の要因には、低いカースト身分による抑圧、単調な村の生活からの脱出願望、神と接触したいという宗教的欲求、世捨て人に対するあこがれなどを指摘できる。しかし、大多数のパウルに共通していることは、程度の差はあれ、彼らが貧困生活から脱却できないで苦しんでいたことである。彼らは、まともな仕事につけないそれなりの理由をかかえていた。門づけ・たく鉢をするしか、生きていける方法がなかった。「門づけ・たく鉢の生活は、飢えよりまし」だったのである。彼らは、世捨て人の生活様式を「模倣」することによって、とりあえず「生存」することができたのである。

このように、パウルになる動機となった要因のおおくは、カースト社会に内在している特質や矛盾に由来するようである。そしてそれらの要因が彼らを脱出できない貧困においこみ、結果として生じた感情的な緊張や心理的な不調和は、パウルには、「現実」であるが「耐えがたい」と感じられていたようである。カーストの身分や地位による限界、インドの家族制度や結婚制度の本質、経済的な不安定さなどに起因するこれらの社会的・心理的な問題に対する解答は、「現実」に耐えるか、「耐えがたい現実から自由になる」かの二者択一である。このような状況のなかで、筆者がインタビューしたパウルのおおくは、こ

これらの問題に対する意味ある解決策を、「文化的に是認された『世捨て』」、すなわち「門づけ・たく鉢の生活」にみいだすことができたのである。

門づけ・たく鉢の生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」である。門づけ・たく鉢の生活は、それがどのような形態であれ、カースト制度が存続するかぎり、個人が生き延びるための「生存戦略」として、これからも再生産されるだろう。また、門づけ・たく鉢の生活は、カースト社会のなかで差別されたり排斥された人びとや、カースト社会の社会関係や規範に疑問をもつ人びとの、心理的・社会的な「適応戦略」として、これからも存続するだろう。バウルの道は、「ボイラギ」(boiragya ヴィシュヌ派の行者)や「ヨギー」(yogî ヨーガ行者)「ファッキール」(faqîr イスラム神秘主義の行者)など、ベンガル社会に存在するいくつかの「世捨ての道」のひとつなのである。

門付・たく鉢の生活がいかにきびしいものであっても、バウルの道は、おなじ道をあゆむバウルのあいだに仲間意識をそだてる。またバウルの道は、ディッカやベックの通過儀礼を通じて、グルとの師弟関係を軸にキョウダイ弟子をつくり、擬制的親族関係の輪をひろげる。さらにバウルの道は、宗教的トレーニングを通じてバウルを鍛える。バウルの歌を通じてバウルの宗教を学び、ヨーガを通じて自己鍛練に努力したバウルは、精神的にも肉体的にも自信をもつようになる。そして最終的に、みずからの肉体の内部に存在する神を実感するために、サドゥナを実践するのである。バウルの道の究極の目標に達したバウルは、宗教的求道者として、世俗の人びとからも評価されるのである。

バウルのライフヒストリーは、バウルがベンガル社会の「周縁部」の輪郭のはっきりした集団であることを十分に示している。ベンガル社会の大多数の人生を規定するカースト制度に対する彼らの否定は、バウルを社会の支配的な部分の外側に、そして対立するものとして位置づける。それにもかかわらず、バウルは、社会的に認知された周縁の集団の構成員として、ベンガル社会と親密に共存している。このように、ベンガル社会の「世俗の人びと」と「バウル」

とのあいだには、社会的・文化的な緊張と均衡が日常的に存在する。そして、バウルという周縁の人間の存在そのものが、ベンガル社会の「中心部」の崩壊を守っているかのようである。なぜなら、バウルの道は、カースト制度がいまだに根づきよいベンガル社会において、社会を拒否した人に、あるいは社会に拒否された人に、「もうひとつのライフスタイル」を提供しているからである。それはあたかも、必然的に矛盾をふくまざるをえない複合社会が周縁の人間を生みだし、その周縁の人間の存在そのものが、社会全体を完全な分裂から守っているかのようである。

5．おわりに

本稿は、インド・ベンガル地方のバウルとよばれる宗教的芸能集団のライフ・ヒストリーの分析を通じて、カースト制度と表裏一体の関係にある世捨てが、現代社会においてどのように機能しているかを考察した。

まず、ベンガルのバウルの現実を理解するには、「バウルの道」という彼ら自身の概念の理解が不可欠であると論じた。そして「バウルの道」は、「ボイラギ」や「ファッキール」など、ベンガル社会に存在するいくつかの「世捨ての道」のひとつであると論じた。

つぎに、ベンガル社会の、「だれが」「なぜ」バウルになったかを検討した。大多数のバウルは、ベンガル社会の経済階層の下層または最下層出身者であることを指摘した。また、バウルになった動機のおおくは、カースト社会に内在している特質や矛盾に起因する社会的・心理的・経済的な問題であると論じた。そして、バウルは自分にふりかかったこれらの問題に対する意味ある解決策を、「文化的に是認された生活様式である『世捨て』」、すなわち「門づけ・たく鉢の生活」にみいだしたことを論じた。これらの議論から、門づけ・たく鉢の生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」とであると結論づけた。

注

- 1) バクティの概念を前面に打ち出したのは『バガヴァッド・ギーター』が最初であるが、ここによく、ヴェーダ以来の正統的宗教が一般民衆に開かれたものとなり、ヒンドゥー教が急速に発展する基盤が形成されたのである。その後、バクティの解釈をめぐるさまざまな論争がおこったが、そのなかでも、人間の努力の価値を否定し、ただひたすら神に身をゆだねることこそが、バクティにほかならないとする考えがしだいに強くなり、中世インドのいわゆるバクティ運動を濃厚に彩ることになった〔宮元 1992: 544-545〕。
- 2) 本研究の資料は、1983年以来、断続的に8回にわたって滞在したインド・西ベンガル州における文化人類学的な調査による。滞在期間は合計32ヵ月で、それぞれの調査期間は、1983年5月から8月まで、1985年5月から8月まで、1987年6月から1989年1月まで、1992年2月から3月まで、1998年7月から9月まで、1998年12月から1999年1月まで、1999年7月から9月まで、そして2002年8月から9月までである。予備調査はとで、本調査はで、そして補足的な調査はでおこなった。
- 3) ヒンドゥー教チャイタニヤ派の開祖。現在の西ベンガル州ナディア県のナヴァドヴィブの出身。弟子とともにキールタン（賛歌）を合唱し、太鼓やシンバルにあわせて歌い踊る詠歌行進を行ない、クリシュナとラダーを崇拜する熱狂的な宗教運動を指導した。晩年にはますます神へのバクティを強め、ほとんど狂人のようになった。
- 4) ベンガルの中世宗教詩における「意図的な語句や表現」については、ダスグープタ〔Dasgupta 1969: 413-424〕を参照。
- 5) サハジャ派の思想およびその歴史的展開については、ボース〔Bose 1986〕、ダスグープタ〔Dasgupta 1969〕、ディモック〔Dimock 1966〕を参照。
- 6) パウルの宗教と宗教儀礼の詳細については、拙稿〔村瀬 1996〕を参照。
- 7) たとえば、ディモック〔Dimock 1966: 254〕およびキャプウェル〔Capwell 1986: 10〕を参照。
- 8) テープレコーダーを利用した面接に応じてくれたのは66名である。このうち、男性の「パウル」は59名、女性の「パウリニ」は5名である。これに加えて、「元パウル」が1名と「在家の弟子」が1名存在する。パウルのライフヒストリーの詳細については、拙稿〔村瀬 1999; 2000〕を参照。
- 9) エクターラ (*ektâra*) とドゥギ (*duggi*) は、一対の楽器として演奏される。エクターラは、ヒョウタンと竹でできた胴に、細い金属の弦をはっただけの軽くて小さな楽器で、片手で持って人さし指で弦を弾く。ドゥギは、半球形の陶器に革をはった小さな太鼓で、腰につるしてもう一方の手でたたく。
- 10) ジョイデブ・メラ (*Joydeb Mela*) は、今日ベンガルにおけるもっとも有名な定期市のひとつで、毎年1月中旬にビルブム県JK村で開催される。JK村は、12世紀のサンスクリット抒情詩人ジャヤデーヴァ (*Jayadeva*) の生誕地として有名である。

- 11) 「ウパナヤナ」は、ヴェーダ学習の資格を得るための入門式。本来は重要な通過儀礼であったが、新たな教育制度ではヴェーダ学習が行われないので、バラモン身分を象徴する「聖紐」をつける儀礼としての意味しかもたない場合がおおい。
- 12) ヴィシュヌ派の聖典『パーガヴァタ・プラーナ』において、クリシュナ神は、牛飼いの姿をした神として登場する。この聖典で描かれるクリシュナ神と牛飼いたち(ゴピー)との甘美な物語は、「神の遊技(līlā)」とよばれ、リーラー・キールタンの重要なモチーフとなっている。
- 13) 「ビガ」(bighā)は、インドの地積の単位。1ビガ 1335.5平方メートル。

参考文献

Bose, Manindra Mohan

- 1986 *The Post-Caitanya Sahajiya Cult of Bengal* (reprint edition). Delhi: Gian Publishing House.

Capwell, Charles

- 1986 *The Music of the Bauls of Bengal*. Kent, Ohio: The Kent State University Press.

Chatterji, Suniti Kumar

- 1986 *The Origin and Development of the Bengali Language* (reprint edition). Calcutta: Rupa & Co.

Dasgupta, Shashi Bhusan

- 1969 *Obscure Religious Cults* (third edition). Calcutta: Firma KLM.

Dimock, Edward C., Jr.

- 1966 *The Place of the Hidden Moon: Erotic Mysticism in the Vaisnava-Sahajiya Cult of Bengal*. Chicago: The University of Chicago Press.

Dumont, Louis

- 1960 "World Renunciation in Indian Religions." *Contributions to Indian Sociology*. No. 4, pp. 33-62.
 1970 *Homo Hierarchicus: The Caste System and Its Implications*. Chicago: The University of Chicago Press.

藤井 毅

- 1992 「名前」『南アジアを知る事典』511-514頁、平凡社。

宮元 啓一

- 1992 「バクティ」『南アジアを知る事典』544-545頁、平凡社。

村瀬 智

- 1996 「『つぎはぎジャケット』と『ふんどし』——ベンガルのパウルの宗教と宗教儀礼」『国立民族学博物館研究報告』20巻4号、717-751頁。
 1999 「パウル群像——ベンガルのパウルのライフヒストリーの研究(1)」『大谷女子短期大学紀要』43号、113-137頁。

- 2000 「バウル群像——ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究(2)」『大谷女子短期大学紀要』44号、45-93頁。

Renou, Louis

- 1968 *Religions of Ancient India*. New York: Schocken Books.

Sen, Sukumâr and Târâpad Mukhopâdhyây (eds.)

- 1986 *Srî srî caitanya-caritâmrta* of Krishnadâs Biracita (Kavirâja). (in Bengali). Calcutta: Ananda Publishers Private Limited.